

運送せしめて、舊所の倉に藏めらる、この時にして事毎に、公私となく大小となく、慶祥すべてありあり、かの大福米の名のむなしからぬも奇といふべし、○中略

文政八年七月朔

琴嶺瀧澤興繼謹誌

稻雜載

〔令義解^田〕凡官田應役丁之處、毎年宮内省預准來年所種色目、及町段多少、依式料功申官支配謂色目者

稻白黒爲色也、稻名爲目也、

〔令義解^八廩牧〕凡廩略○中日給細馬粟一升、稻三升謂稻者半糠米、故稱升也、豆二升、鹽二勺、中馬稻若豆二升、鹽二勺、

驚馬稻一升、

〔延喜式^五齋宮〕凡諸國送納調庸并請受京庫雜物積貯寮庫支配雜用○中略馬秣稻百廿束太神宮所充三時祭別

冊束

〔日本書紀^{十五}顯宗〕二年是時天下安平、民無徭役、歲比登稔、百姓殷富、稻斛銀錢一文、牛馬被野、

〔日本書紀^{二十四}皇極〕元年五月丁丑、熟稻見、

〔日本書紀^{二十七}天智〕三年十二月、是月淡海國言、坂田郡人小竹田史身之猪槽水中忽然稻生、身取而收、

日々に富、粟太郡人磐城村主殷之新婦床席頭端、一宿之間、稻生而穗、其且垂穎而熟、明日之夜更生一穗、新婦出庭、兩箇鑰匙自天落前、婦取而與、殷得始富、

〔扶桑略記^五天武〕七年三月、因幡國貢稻一莖、中有八千粒、

〔日本書紀^{二十九}天武〕七年九月、忍海造能麻呂獻瑞稻五莖、每莖有枝、由是徒罪以下悉赦之、八年、是年

○中略因幡國貢瑞稻、每莖有枝、

〔續日本紀^{一文}武〕元年九月丙申、京人大神大網造百足家生嘉稻、

〔三代實錄^三清和〕貞觀元年十月廿八日庚戌、上野國獻嘉禾一莖三十穗、兩岐稻一莖九穗、

〔春波樓筆記〕吾日本米穀を以て食の第一とす、世界の諸邦此の米かつてなし、五十度外にしては、